

今年度、隠岐を調査する研究者をご紹介します！

隠岐をかけめぐる！



研究者たち 2026



(一社) 隠岐ジオパーク推進機構では、隠岐で調査を行う研究者を応援する『隠岐ユネスコ世界ジオパーク学術研究奨励事業』を実施しています。

今年度、隠岐で調査を行う6名の研究者をご紹介します！

研究者の調査へのご理解ご協力をよろしくお願いいたします。



研究者 1

あきざわ のりかつ

秋澤 紀克さん (広島大学)

26万年間の日本海マントル熱化学進化史：
隠岐島前・島後産カンラン岩捕獲岩からのアプローチ

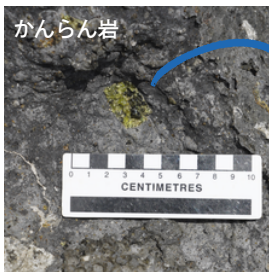
調査地

島後・西ノ島

4年目

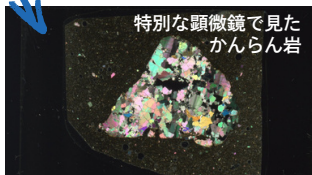
我々が住む地殻の下にはマントルが存在します。マントルを構成する物質はかんらん岩と呼ばれ、普段手にすることのできない貴重な物質です。

隠岐島後ではマントルがカケラとしてマグマによって運ばれたかんらん岩捕獲岩が採取可能であり、その化学的な解析を行っています。本研究ではこれまで報告されていない隠岐島前においてもかんらん岩捕獲岩の露頭発見を目指すと共に、隠岐島前・島後のかんらん岩捕獲岩を用いてその表層への輸送期間の違いである26万年間のマントルの熱化学的進化を理解することで、日本海進化史理解を目指します。



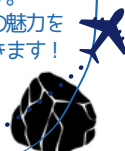
かんらん岩

岩石を0.03mmまで薄くして、顕微鏡で調べます！



特別な顕微鏡で見たかんらん岩

隠岐島のかんらん岩を用いた研究は海外の研究者と共同で実施しています。これからも隠岐島の魅力を世界に発信していきます！



研究者 3

はにゅうだ たけあき

羽生田 岳昭さん (北里大学)

隠岐諸島における絶滅危惧種エビアマモの
遺伝的多様性の解明

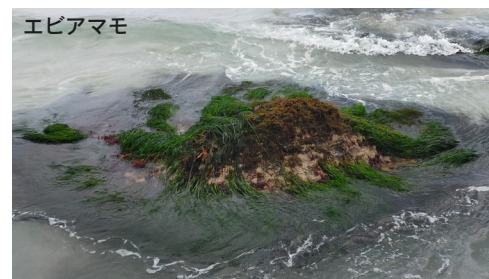
調査地

島後・海士

1年目



エビアマモ



「エビアマモ」と聞いてすぐに思い浮かぶ人はなかなかいないと思います。エビアマモはイネなどと同じ単子葉植物なのですが、陸上ではなく水中、しかも海の中に見られる植物です。

同じような植物に「アマモ」がありますが、アマモが砂地に根を張るのに対し、エビアマモは岩の上に根を張るという特徴があります。また、アマモと同じくエビアマモも、海の森とも呼ばれる「藻場（もば）」を作っている海草（うみくさ）として重要な役割を担っていますのですが、近年では生育地が減少しており、絶滅が心配されています。

今回の研究では、隠岐諸島に生育するエビアマモについて、遺伝的な多様性や特性を明らかにし、保全につなげたいと考えています。



エビアマモを通じ、海環境について興味を持てただけだと嬉しいです。エビアマモを見かけられましたら是非教えてください！

研究者 2

やまさわ たい

山澤 泰さん (富山大学)

隠岐諸島島後におけるコウベモグラとアズマモグラの
共存機構の解明

調査地

4島すべて

2年目

僕はモグラの生態について研究をしています。隠岐島後にはコウベモグラとアズマモグラという2種類のモグラが共存しています。コウベモグラはアズマモグラより体が大きく強いのですが、食べものや住む環境はどちらも非常に似ています。そのため、弱いアズマモグラはコウベモグラに追いやられてしまい、2種が仲良く共存することは難しいと考えられています。

僕は隠岐諸島の地形や土壌環境、地質の特徴を現地で調べたり、遺伝子を使ってモグラが島に渡ってきた歴史を読み解いたりすることで、なぜ2種が共存できているのかを明らかにします。

去年は島後のあちこちを調査させて頂きました。とても穏やかな隠岐の雰囲気が好きになりました。今年は島前3島でも調査を行います。調査中にお声がけさせて頂くことがあるかと思いますが、その際は何卒宜しくお願い致します。



研究者 4

えんどう はやと

遠藤 颯さん（東京都立大学）

隠岐諸島におけるミミズの「大陸遺存」と「島嶼適応」の
統合解析 — 動かない生き物が日本海形成の地史を語る —

調査地

4島すべて

1年目

隠岐諸島は、大陸とのつながりや火山活動、海面の変化などを経て現在の姿になった、とても特徴的な島々です。

本研究では、土の中に暮らすミミズを調べることで、こうした島の歴史と生きものの進化の関係を明らかにすることを目指しています。ミミズは遠くへ移動することが苦手なため、その分布やDNAには昔の環境の変化が記録されていると考えられます。

調査で得られた成果は、隠岐の自然の価値を知る新たな手がかりとなるだけでなく、環境保全や自然学習、ジオパークでの展示・教育などにも活用されることが期待されています。

隠岐の本当の魅力は、目に見える景色だけではなく、足元の土に眠る『大地と生命の物語』をミミズの研究から明らかにし、その価値を未来へつなぐ、隠岐の自然が次世代の誇りとなるよう地域へ還元していきたいと考えています。



研究者 5

かしま りょう

鹿島 稜さん（広島大学）

隠岐島浅海域における魚類群集構造の把握
および隠岐周辺海域の魚類相の整理

調査地

島後

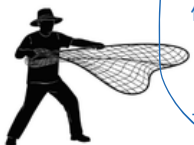
1年目



本研究では、手網を用いて隠岐諸島の浅海域（水深1 m程度）で海草が生える場所や岩場、砂地などの生息環境、昼と夜といった活動時間、そして季節による小型魚類の種類や個体数の違いを調べます。

得られた成果は、隠岐の海の豊かさを科学的に示すとともに、自然環境の保全や持続的な利用、展示や環境学習などに活用できる形で発表を行います。本研究を通して隠岐諸島の魅力を広く発信するとともに、地域住民の参加型調査へ発展させることを目指します。

今回の調査では、隠岐の浅い海で魚を調べ、「どんな魚が、いつ、どこにいるのか」を記録していき、この海の魅力や面白さを多くの方に伝えていきたいと思っています。捕れた魚をお見せしながら、お話できたら嬉しいので、もし海辺で私たちを見かけたらぜひ気軽に声をかけてください。



研究者 6

いしい こうえい

石井 晃瑛さん（慶應義塾大学）

島嶼性陸棲貝類の生態学：

隠岐諸島固有の陸棲貝類はどのような菌類を食利用し、その食性は隠岐の島嶼環境や地史的変遷とどのように関係しているのか？

調査地

島後・西ノ島

1年目

隠岐諸島には、この地域にしか見られない貴重なかたつむり（陸棲貝類）が数多く生息しています。

これまでの研究から、かたつむりときのこ（菌類）の間には「食べる・食べられる」という関係があることは分かっていますが、どのような菌類を利用しているのかなど、その詳しい実態はまだ十分に明らかになっていません。本研究では、野外調査やDNAを用いた分析を通して、陸産貝類と菌類との関わりを明らかにすることを目指します。

この研究により、隠岐の豊かな自然環境や生態系がどのように支えられているのかを理解し、地域の生物多様性の保全や自然環境の価値を伝えることにつながることを期待しています。

研究のため、夜間に森林へ入り、かたつむりの行動や生息環境の調査を行うことがあります。地域の皆さまにはご心配をおかけすることもあるかもしれませんが、自然環境に十分配慮しながら調査を進めてまいりますので、温かく見守っていただけますと幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。



関連イベントも実施予定です！

『隠岐ユネスコ世界ジオパーク学術研究奨励事業』では、隠岐で調査を行う研究者を応援するだけでなく、その研究成果を隠岐諸島民の皆さまに伝えることにも取り組んでいます！今年度は下記の取り組みを予定しています。

研究成果 4 島巡回展示 『隠岐にはまだ謎がある』
昨年度調査を行った研究者たちの成果をまとめた展示
(2026年9月～2027年1月・4島各島会場にて)

詳しくはこちら！



研究成果発表会
今年度調査を行った研究者たちの成果の発表会
(2027年3月・オンライン予定)

ぜひご観覧・ご参加ください！

本事業に関するお問合せは、下記にお寄せください。
(一社) 隠岐ジオパーク推進機構 (☎08512-2-1577)

